

オニゲシ

VOLT COMPANY

成人向



成人向

二見 瑛理子

「あなた…おしりに興味があるの？
ふーん…そういう趣味だったのね」

「ふ、二見さん…いや…その…」

「見たい？」

「え？」

「私のおしり…見てみたい？」

→「そ、そりゃもちろん！」

「女の子がそんな事言っちゃダメだよ！！」



「そ、そりゃもちろん見てみたいさ！」
「フフ…正直ね…」

「正直者なあなたにごほうびよ…
ほら…見せてあげる」

二見さんはいきなり廊下の
ど真ん中でスカートの後ろを
まくりあげ、パンツをずらして
お尻を見せてくれた。



プーん♡

「わっ！こ、こんなところで!？」

「大丈夫よ…誰も気づいてないわ」

僕たちは理科準備室に移動した。
「ここなら誰も来ないわ…
思う存分実験できるわね」

「…わたしのお尻…どう？」

二見さんがお尻を指で開くと
肛門がはっきりと見えるよう
になった。
うっすらと色づいたそこに
僕は熱い視線を注いだ。

「あなたの…自由にしているのよ…」



僕は二見さんの肛門に指を入れてみた。
「んっ…」
「凄…二見さんのおしりの穴…
僕の指を締め付けてくるよ」



三見さんの肛門に試験管を挿入する。
「三見さんのお尻にこんなイタズラできる
なんて…夢みたいだよ」
「相原……こ、これは結構恥ずかしいわ…」

「下から覗き込んだら中まで見えちゃう
かもね」
「そ、それはダメよ！」
「なんでも好きにしていって
さうき言わなかったっけ？」
「もう…意地悪ね…」

「IQ190の天才美少女の肛門に
試験管がささっている光景はそうそう
見れるもんじゃないからね」

「だ…誰にも言っちゃダメよ…」

理科準備室内に二見さんが僕のチンポを
フェラする音が響く。
「ん…んむ…はむ…」

鏡に映った肛門には試験管がささったままだ

「あなたのここ…いつもより元気ね」
「そりゃあこんな凄いオカズを見てたら
元気にもなるさ」
「もう…あまりそこばかり見ないで…」

「ふ、二見さんっ…出るよっ！」

「あ、あむ…んん…♥」

「凄い量…それに濃いわ…」

「あっ♥あっ♥あんっ♥」
二見さんの肛門にチンポを何度も出し入れする。
その度に二見さんが嬌声をあげる。
「二見さんのお尻…凄いやっ」
「あ…相原っ…そんなに動かさないでっ…」
「でも気持ちよすぎて止まらないんだよっ」

ビ
ク
ッ

ポ
ル

ポ
ル

メ
イ
ク
ッ

ア
ッ
ッ

ク
ッ
ッ

ビ
ク
ッ

「ふ、二見さんは気持ちよくない？」
「き、気持ちいいっ…気持ちいいわよっ…
んあああっ♥」

「ふあっ…♥あっ♥あんっ♥」
あれから三見さんの実験はさらに
エスカレートしていった。
今日は全裸で学校内を散歩した後
校舎裏でアナルセックスした。



「だっ誰か来たら…三見さんが
お尻でイクところ見られちゃうねっ」
「あんっ…ダメっ…言わないでっ…♥」
「はああああっ♥」

咲野 明日夏



「よーし…思い切って
咲野さんの・・・」

「さ、咲野さんっ…!!」

「えっ…?何!?!」
「もう…あなたって変わった趣味してるね」

「はああ…咲野さん…っ
たまらないよ…」

「わっ!そ、そんなどころの
におい嗅いじゃだめっ」

「大丈夫だよ、とっても
いいにおいだよ!」

「ううー恥ずかしい…」



「ほ、ほんとにこんなトコロが見たいの・・・？」

「恥ずかしいけど…はいっ…」



「れ、練習で汗かいたから…あんっ…」



「咲野さんのアナル…ちよつとしよっぱいね」

「知ってる？スポーツには
括約筋を鍛えるといいんだよ」

ピロ

ピロ

ズググ

「そ、そうなんだ…
わたし、がんばるねっ…」

「あんっ…ふあぁっ♡」

ピロ

ズググ

ズググ

ズググ

「ほらほら…もっと締め付けて」

「体力回復には精液が一番なんだよ」
「たっぷり飲んでいいからね」

「うん、ありがとう…♡」

「んっ…んむ…♡」

しゃぶ

しゃぶ

しゃぶ

しゃぶ

しゃぶ

こうして、僕は咲野さんに毎日
しゃぶってもらった。

星乃 結美

—校庭—

「あ…あの…相原君…」

「何？」

「相原君がくれたこのチア服
なんだけど…」

「なんだか凄く露出度が高い
ような気がするの」



「そんな事ないよ！今時このくらい
当たり前だよ！」

「そ、そう？」

「うん、それに星乃さんは
少し地味だから、多少露出度高い
くらいでちょうどいいと思うよ」

「で、でもこれ…見えてない？」

「え？何が？」

「う、ううん。見えてないなら
いいの」

布地を減らし、生地を
シースルーにしたチア服と
ほとんどヒモ同然のパンツ。
校庭にいる他の男子が
ちらちらとこちらに視線を
おくってくる。



「さ、見ててあげるから演技してみて」
「う、うん」

「フーっ！フーっ！輝日南！」
星乃さんが演技を始める。
いきおい余って色んなところ
はみ出たり飛び出したりしてるが
星乃さんは演技に集中して
気づいてないみたいだ。

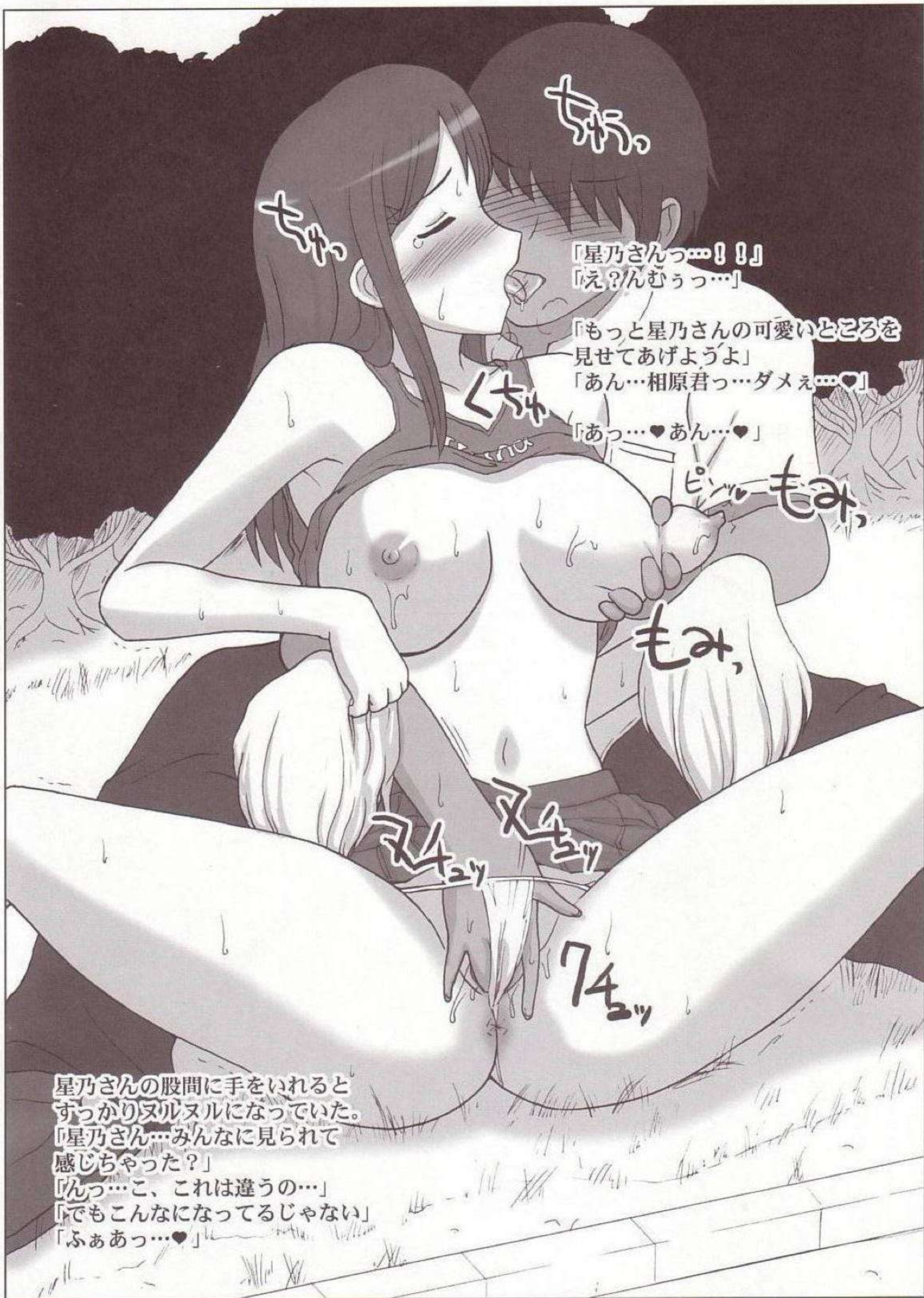


「星野さん、ほら、あんなにギャラリーがいっぱいだよ」
「みんな星野さんに注目してるんだ。もっとサービスしてあげないと」

「え…う、うん。こんな感じかな…？」

注目をあびていつになくテンションが高まった
星乃さんはいつもなら絶対しないような
煽情的なポーズでお尻をふった。

ギャラリーの男子生徒たちは食い入るように
星野さんの真っ白なお尻を見つめている。



「星乃さんっ…!!」
「え?んむうっ…」

「もっと星乃さんの可愛いところを
見せてあげようよ」
「あん…相原君っ…ダメえ…♡」

「あっ…♡あん…♡」

もみ、
もみ、

もみ、

ヌル、
ヌル、

ヌル、

星乃さんの股間に手をいれると
すっかりヌルヌルになっていた。
「星乃さん…みんなに見られて
感じちゃった?」
「んっ…こ、これは違うの…」
「でもこんなになってるじゃない」
「ふああっ…♡」

「あっ♥あんっ♥はんっ♥」
衆人環視の中、星乃さんの
アナルを突きまくる。

「だっ…だめえっ
見ないでっ…♥」

ゴゴゴ

ビク

ズキ
ズキ
ズキ

ズキ
ズキ
ズキ

ゴゴ

ズキ
ズキ
ズキ

ズキ
ズキ
ズキ

ドク
ドク
ドク

ドク
ドク
ドク

「星乃さんのイクところ、みんなに
見でもらおうねッ！」
「やっ…はあああああんっ♥」

水澤 摩央

保健室にふたりきり。

「光一…ほら…今なら誰も
いないわよ」

「女の子のこと…教えてあげる♥」

摩央姉ちゃんはそういうと
体操服の前をまくりあげた。

形の良い大きなおっぱいが
僕の面前に露出する。

「ま、摩央姉ちゃんっ」

「あん、もう♥

そんなにかっつかないの」

「いきなり強くしたら痛いんだから
女の子はやさしく扱うのよ」

ポ
ル
ン
ッ



「ま、摩央姉ちゃん…体温測ってもいいかな…？」

「え…？そんなの測ってどうするのよ…って」

「ひょっとして…光一…？」

「うん、直腸検温させて欲しいんだけど」

「あなたね～っ…いきなり
そんなマニアックな事に
チャレンジするなんて…」
「ダメかな？」
「もう、しょうがないわね。
はい、いいわよ測って…」



「摩央姉ちゃん…体温計がふるえてるよ」

「んっ…あんまりじっと見ないでよっ

…恥ずかしいんだからねっ」

「だから見たいんじゃないか」

「…光一のバカっ」

その後、摩央姉ちゃんが女の子のからだのしくみをじっくりと教えてくれた。
「いい光…ここ、ここがオマンコよ…」
「この上の突起がクリトリスでその下の穴が尿道、そのさらに下にあなたのがはいるの…」

ドキ

ドキ

ぽんぽん

「さ、それじゃあ実際に入れて見て♥」



粘膜のこすれる音が保健室に響く。
「こ、光一っ…あんっ…もっとゆっくり…んああっ」
「そんな事言っても…摩央姉ちゃんの中
気持ちよすぎるんだよっ」

「くっ…僕…もうイキそうだっ…」
「ダメよ光一…中に出しちゃ！」
「じゃ、じゃあお尻に出してもいい？」
「うんっ…そ、そっちならっ…」
「あっ…ふあっ…はんっ…♥」



「いっイクよ摩央姉ちゃんっ！！」
僕は摩央姉ちゃんの肛門にチンポを突っ込み、
中で思い切り射精した
「っくう！！」
大量の精液が摩央姉ちゃんの直腸に
注ぎ込まれる。
「んはああああっ♥」

栗生 恵

僕がぼーっと道を歩いていると
一陣の風が吹いた。

「きゃああっ」
振り仰ぐと坂の上に栗生さんがいた。

「ふ、ふんどし!?!」
「みっ見ないでっ!?!」

風でひるがえるスカートの中には
栗生さんのお尻に食い込む純白のフンドシが
燦然と輝いていた。

(生きてて良かった…さすが栗生さんだなあ)

相原 菜々

里中 なるみ



「わ、わたしだって負けないもん！
お兄ちゃん、見てっ♥」

「ちがうもん！ 菜々の方が綺麗だもん！
ねっお兄ちゃん」



「先輩っ！わたし先輩になら
こんなところまで見せちゃいますっ♥」

「わたしのお尻の方が綺麗ですよねっ？」

祇条 深月



祇条さんに特製レオタードをプレゼントして
バレエの練習を見せてもらった。

「こんな感じでよろしいですか？」

「た、大変けっこうです」
スケスケのレオタードの下に祇条さんの
大事なところが透けて見える。

「あの…どうかいたしましたか？」
「いえいえ、そのままそのまま」
僕はじっくりと感動的な光景を堪能した。

ひろみ

「でも…恥ずかしいねコレ…」

「わ、脇役だって少しは見せ場があってもいいでしょっ」

ゆみこ



■あとがき■

こんにちはアナルアナリスト旭丸です。
今回はおしりばかり描いてみましたが
いかがでしたでしょうか？
もっと描け！もしくは他のところも描け！と
いう方はHPのメールフォームよりご意見
くださいませ。

しかし二見さん可愛いですねー。もっと描きたかった。
祇条さんも栗生さんも菜々もうどんもあんまり
描けなかったので残念！
地味、ステルス機能搭載と評判のメインヒロイン
星乃さんが意外にエロいと気づきました。最近。
チア服って良いですね

アスカターンは結構においそうな
気がするのであんな感じにしてみました！
汗まみれのブルマをくんくんしたい。

いやーしかしPSでこんなエロゲーを発売
していいとは良い時代になったものですな。
キスって充分性行為とかいうかむしろ最近は一
周してセックスより全然エロい行為なんじゃ
ないかと思えてきました。

キスがOKなら、法律的には性器ですらない
お尻は充分描写可能なはず！
そのうちキミケツもPS2で発売してくれる
時代が来ると思います。
ケツから始まるラブストーリー！

では、また次の本で。

■奥付

発行：2006・8・13 印刷：ねこのしっぽ

VOLTCOMPANY / 旭丸

mail:volt@nona.dti.ne.jp

HP:<http://www.nona.dti.ne.jp/^volt/index2.html>

「深海60000」

描きたかったあねっ

アスカターン





キミガツ! 

VOLTCOMPANY.